

大会長講演

私が思うところの… 「教育」「教育者」「教育施設」

山藤 賢

(昭和医療技術専門学校)

今回、大会長講演として、貴重なお時間を頂けたことに誠に感謝いたします。あくまでも私見にはなりますが、私が思うところの…ということで、この学会のテーマでもあります、臨床検査技師教育の歴史を紡ぎ、そして教育者としての在り方を考えるという部分で、若輩者ではありますが、何か皆さんと議論、共有できるようなお話しができたらと考えております。

「教育」「教育者」「教育施設」と演題名にかかげておりますが、この3つは、それぞれ独立してお話しをする必要もあれば、繋がった話をする必要もあります。またこれに「臨床検査技師」という言葉を組み合わせる必要も、ある時もあれば、ない時もあるかと思えます。そしてその両方が大事であるとも思えます。そのあたりをいったりきたりしつつ、本校の教育内容なども紹介し、テーマを掘り下げていきたいと思えます。

私の考えにはなりますが、教育とは何をすべきかと聞かれるたびに、今はその目的を、「一人で生きていく『知恵』と『力』を身につけさせること」そしてそれを、「共同生活の場である『社会』に還元すること」と答えています。臨床検査技師教育という部分をさらに強調するならば、それに加えて、医療人として「やさしい『心』をもつこと」と答えています。ですので、私が昭和医療技術専門学校の（臨床検査技師教育に単科として携わる施設の）学校長の立場で答えるなら、この二つを合わせた、「一人で生きていく『知恵』と『力』を身につけさせることと、やさしい『心』をもつこと」が私の考える、「教育」です。

では、そのような「教育」を行う上での、「教育施設」と「教育者」はどうあるべきなのか。これが、本学会で掲げたテーマとして皆さんと考えて共有していきたいことではありますが、当然、各教育施設はその成り立ちや特徴、役割はそれぞれ異なり、もちろん正解があるわけではなく、だからこそ常に私達が考え、勉強し、成長していかななくてはならないことであると思っています。

私は、このようなテーマの講演や執筆を依頼いただくことが、最近では幸いなことに数多くあり、未熟な立場ではありますが、そのたびに、3つの立場でお話しをさせていただいています。

私の立場ですが、現在、臨床検査技師教育施設の学校長としての立場の他、医療法人理事長として複数の医療機関を抱え、経営者の立場としての仕事もしています。また臨床の現場においての現役の医師としての立場もあります。このことは、医療従事者を雇用する側の立場、送り出す教育者としての立場、一緒に現場で働く仲間としての立場、の3つの立場を意味しています。例えば雇用者としての立場で考えた時、何を重要視するのでしょうか。私共の法人の医療機関では、その採用面接などの際、一切学歴は問いません。その者が、どのような意欲で仕事に臨もうとしているのか、その人物の良さは何なのか、私共が掲げる「居心地のいい医療機関」を創造していくのにマッチしている人物か、を見定めています。医師としての立場で、現場で働く仲間として考えた際はどうか。やはり、コミュニケーション能力に長け、積極的で行動性のある医療従事者と働きたいと思うでしょう。そして、知識と技術を持って、共に物事を共有しつつ仕事をしていく仲間を欲しいと思うでしょう。学歴や偏った専門性だけを掲げ、あいさつの一つもできない臨床検査技師は、医療の現場では必要とされません。だからこそ、教育の現場に立ち返った際には、いつもその3つの視点に立って、私共の学校教育において「必要な教育」というものを考え、学生と向かい合い、学校教育に臨んでいるつもりであります。

最終的に、私達教育施設の目的は、その学生を社会と結びつけることであると考えております。そこで、「臨床検査技師」という領域の話でその事を考えると、あくまでも私見ということで、誤解を恐れずに述べるとするのなら、社会から必要とされる臨床検査技師とは、「医療の現場から必要とされる人材であること」と考えています。これは私の考えであると同時に私共の学校教育の中で、主軸となっている考えでもあります。

臨床検査技師という名称の『臨床』とは、『現場』ということの意味しています。そもそもの臨床検査技師の在り方を考えたとき、やはり、医療の現場から、そして医師から必要とされる臨床検査技師でなければ、その存在意義は見い出せないと思っています。もちろん、歴史も踏まえて、その業務の多様性や価値観からも考えて、色々な場面での臨床検査技師の必要性や可能性があることは重々承知しています。また今後はその役割は益々多様性を増し、重要性を増していくことでしょう。その上でですが、やはり原点に帰って考えれば、それでも医療の現場で必要とされる人材、職種でなければ、そこに「医療従事者」としての価値は認められません。だからこそ、今、あらためて一番必要とされる臨床検査技師の要素は「人を思いやることができる心を持った医療人」と考えています。

私のような未熟な人間の立場で、全てがこうであるというような壮大な結論的な話は元来できるものではありません。せいぜい本校で行っていることをベースにお話することしかできませんので、そのあたりをご理解いただきつつ、本校での教育内容に少し触れ、医療人としての根幹を成す大事なことについて考えたいと思います。本校ではスローガンとして「全員卒業・全員合格」というものを掲げています。これは国家試験の合格を一つの目的としている教育施設ではありますが、その目的が合格率の高さなのではなく、一人一人の学生を幸せにすることが目的であるという考え方から来ているスローガンです。そこに存在するのは、個人主義をよしとせず（個性はもちろん大事です）、同じ目的を持った仲間を大事にし、お互いが支え合いながら全員で合格を目指す姿です。幸い、昨年度の卒業生も、前年に引き続き、最終学年において、一人の留年者も出さずに全員が国家試験に合格することができました。なぜそのようなことを大事にしているのか。それは「自分さえよければいい」という人間は、人とその命に係わる医療従事者に向いていないと考えているからです。昨今、臨床検査技師教育は大学教育、大学院教育を中心にシフトしている傾向にあります。それはそれで臨床検査技師教育の在り方として、とても大事なことです。しかし、3年制・4年制を問わず、それぞれの学校にはそれぞれの理念や特徴、それぞれの良さがあります。その中で、私共が学校として大事にしているのは、「どのような医療人になって欲しいのか」という前提を大事にしたうえで、その目的に向かった細分化された専門性であります。

医療現場の立場からは、臨床検査技師養成校の卒業生は、卒業してから現場での「即戦力」としての活躍を当然期待されています。そこに私共の学校ではもう一つ、就職後も勉強と自己研鑽を積み重ねる向上心を持った「成長力」を持った社会人を送り出したいと考えています。そのような「即戦力」と「成長力」とを合わせて「現場力」と名付け、本校においては「現場力」の高い臨床検査技師を生むべく教育内容に力を注いでいるのが特徴であります。

例えば、本校においては臨地実習は6カ月間行っています。これは昨今では実習期間の短縮傾向にある中、現在、全国でも最も長い実習期間を設けている学校の一つであります。もちろん、ただ長いことがいいと言うものではありません。しかし、臨地実習というものは、元来、各校が「国が定めた最低限の期間をクリアする」ことを目的にやるものではないでしょう。本校では「現場力」を高めるために、それだけの医療現場での学生時代の生きた経験が必要と考え、現場の臨床検査技師の先生方の協力を仰ぎ、未来を担う臨床検査技師の育成に共に力を注いでいるのです。

大切なのは、現段階（の臨床検査技師教育の規定）においては、各校がそれぞれの目的を持ち、その物事の期間や内容、「在り方」を考えるとということにあるのではないかと考えています。

また、本校に来ていただいた来客者は、本校の学生がどの方にも元気に挨拶をすることに驚かれます。外部から来ていただいている講師の先生方は、学生の素直さや、講義を聞く姿勢に、

とても好感を持っていただいています。学生は廊下にゴミが落ちていたら、気付いた人間が自分で拾っています。そして、朝、授業前から来て、校内や、周囲の地域の掃除を自主的にしている学生たちがたくさんいます。しかし、そこには決してやらされている雰囲気はなく、真面目に勉強にだけ励んでいるわけでもなく、学生らしい元気さ、笑顔に溢れた様子がかえりません。近所の方々はそんな学生達を見て、しょっちゅう差し入れを手渡ししてくれています。そして、そのようなことを当たり前のように3年間行ってきた学生は、医療の現場に出てからもそのような根底にある社会人としての在り方、医療人としての在り方、人としての在り方を自然に身につけており、変わらず実行し続けてくれるのではないのでしょうか。我々医療従事者は、白衣を着たその日から、患者様から見れば、一年目も十年目もない、ただの一医療従事者としてしか見られません。その中で必要な「即戦力」という要素は、知識や技術のみならず、その医療人としての振る舞いや在り方の部分が一番大切であると考えています。我々が考える、将来にわたって必要とされる臨床検査技師としての在り方は、そのような「人間力」を身につけた、そしてこの社会で「一人で生きていく強さ」と「心のやさしさ」を兼ね備えた医療人でありたい。そのような考えは、あまりにも根本的で、医療の発展やグローバル化という名の元に行われている改変の波とは垂直であるかもしれません。そのため、本校の教育で大切にしていることは、一見すると「古い」考えとやり方のように見えるかもしれませんが、本当は医療界・教育界において忘れてはならない根本となる大事なことであり、その実行は反って「新しい」ことでさえあるかもしれないと考えています。

「教育」「教育者」「教育施設」その考え方は、人それぞれ、施設ごとそれぞれで当然であります。画一的な正解があるわけではなく、だからこそ、何かを人に押し付けたり否定したりするのはではなく、それぞれの教育者・施設が自分達の価値観で作り上げていかななくてはなりません。

私は、大事なことは、各養成校がそれぞれの独自の理念や教育方針を掲げて、その役割を全うすることであると思っています。そして教育者一人一人が、そのことに対し信念と誇りを持ち、学び、変革し続けることが必要です。

私はそのようなことを「旗を掲げる」という表現でいつもお話しさせていただいております。各養成校が、それぞれの役割を考え、その独自の旗を掲げること。それこそが、学生にとって、進路を選ぶ際に大事なことであり、個性あふれる、なおかつ医療人としてふさわしい心を持った臨床検査技師を生むことになるのではないかと考えています。

また日本臨床検査学教育協議会も、多様性の中で、各養成校の進む道を大きく見守りながら、大きな理念で今後動いていかなければならないことでしょう。

講演の際には、現在本校で行っている、「日本語表現法」や「人間学」、「医療人特論」といった、内容として特色のある授業から、卒業式を始めとした本校ならではの特徴的なイベントなども紹介し、本校教育におけるチャレンジの一端を報告させていただきつつ、皆様と一緒に

「教育」「教育者」「教育施設」の在り方を考える時間になればと考えています。そして、教育者として一人一人の「旗を掲げる」ための学会に結びつけば幸いです。

甚だ拙い内容ではありますが、少しでもその後の学会議論のたたき台にいただければと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。